



2010年、新規奨学生との記念写真。左端が筆者

程を開設している。中国にはソ連、欧米諸国、日本から環境技術援助を受けた歴史もあって、先進国から環境技術援助を受け入れ、自己消化した後、自国技術として、他国に伝授するという現象が起きていることが分かる。この現象を、私は環境技術援助のバッファリング効果と呼んだ。中国が、先進国と環境技術後発国の間の環境技術の応用拡大に仲介役を担ったことを、私は事例調査を通じて検証した。

二〇〇九年、修士課程を修了後、私はイオンに入社し、一年半の店舗勤務を経て、秘書

部に異動、現在社長秘書を担当している。多岐にわたる経営情報が飛び交う社長室の業務は大変チャレンジングであるが、並々ならぬ責任感を感じ、不安ばかりであった。幸い、仕事を一つ一つ覚えていき、不慣れではあるが、こなしてこられた。何といても、奨学生時代の充実した学生生活から学んだ社会知識と身につけた能力がないと、いまの自分はないとあらためて思った。本当に感謝の一言に尽きる。

「平和・人間・地域」の理念に 共鳴して

現在の私の夢は、日中友好のために、何らかの力になることである。どうやって、それを実現できるのかをずっと考え続けている。

いま在籍しているイオンも「平和・人間・地域」という理念を掲げており、私もそれに共鳴している。日中の懸け橋になるべく、ビジネスもさることながら、普段の交流においても、私は相手に他国の文化と価値観などを正確に伝えることを心掛けている。例えば、中国人は旧正月に皆が餃子を食するという既成観念が多くの日本人にあるが、実際中国の華南地方ではその慣習がない。さらに、「中国人」という概念のなかに、ウイグル族、モンゴル族のような少数民族も含まれていないだろう。ここで言いたいのは、「・・・だから、・・・」という既成観念の束縛を打ち破らないと、偏見を起こし、物事を正確にとらえることができない。それは、日本人といっても東北地方と九州地方の県民性は丸ごと違うのと同じだ。当然、偏らない説明をするために、中国人として一般の常識を有しながらも日本の歴史と文化も正しく知らなければならぬと思う、私はさまざまな本を読んでみた。自分の教養を高めようとしながら、思いついたのは日中両国とも漢字圏の国なのだから、お互いの違うところばかりを見いだそうとするより、共通の部分を探し、共鳴を起した方が相互の理解にもっとつながりやすいのではないだろうか。

小さな奇跡を人生の軌跡に

「光陰矢の如し」、奨学期間が終了して、もう五年経った。奨学金をいただいた最初の「奇跡」を皮切りにして、勉強でも、仕事でも、私の生活において、数多くの小さな「奇跡」が連鎖的に起こった。これらの「奇跡」が私の軌跡となり、これから進むべき道も徐々にみえてきている。

飛行機が高度を下げ、実家の広州の燦爛たる夜景はすでに目に取まっている。いまの目的地はまさしく一〇年前の出発地でもあった。間もなく、わが人生の新しい「奇跡」がまた始まるうとしている。

小さな奇跡を人生の軌跡に

イオン社長室

黄 振宇

こう しんう

国際文化交流財団二〇〇五年度奨学生。中国・広州出身。二〇〇一年来日、〇七年千葉大学法経学部・総合政策学科卒業。〇九年東京大学大学院新領域創成科学研究科・環境研究系・国際協力学専攻博士前期課程修了。〇九年四月イオンリテールに入社、一〇年九月イオン秘書部に
出向、現在イオン社長室に所属。

中国・広州に向かう飛行機のなかに、窓側に身を寄せて、夕焼けの輝きが少しずつ縮んでいくのをずっと眺める。それは夢を追っていく私の姿であった。

二兎(学業、生計)を追う

私費留学生として来日した私は、生活費と



司馬遼太郎記念館前にて

学費の両方を自分で稼がなくてはならなかった。両親の仕送りを断り、自分の夢を追うために、自分が稼いだお金しか使わないと決めていた。当時、私は時給七八〇円のラーメン屋で深夜三時までアルバイトをしていた。二〇〇三年、私は千葉大学の法経学部・総合政策学科に入学したが、なかなか学業と生計の両立ができなかった。二〇〇五年、国際文化交流財団の奨学生に選ばれ、月間五万円の奨学金をいただけると決まったときは、まさに「奇跡」だと思った。奨学金のおかげで、アルバイトの時間を減らし、勉学と課外活動に打ち込む余裕ができた。当時、環境問題に大変興味を持ち、千葉大学の環境ISO学生委員会を発足メンバーとして立ち上げ、後に幹部として千葉大学ISO14001環境マネジメントの運営に参加したり、マレーシアのマラッカで行われた国際青年会議に出席したり、環境省のエコ作文コンテストに応募

●経団連国際文化交流財団は、経団連第二代会長故石坂泰三氏の遺徳を記念し、一九七六年に設立された。海外の大学・大学院に留学する日本人学生や日本の大学に在籍する外国人留学生に対する奨学金の支給を通じて、わが国の学術研究や世界経済の発展に寄与するとともに、国際社会に貢献する人材を育成することを目的に活動している。

し受賞したりと、多忙な学生生活を送った。そして、課外活動にとどまらず、京都議定書と二酸化炭素排出権のような国際環境協力の領域を研究したいと思ひ、国際間の環境協力を自分の研究方向として、東京大学の新領域創成科学研究科・環境研究系・国際協力学専攻に進学した。

苦尽甘来

新領域創成科学研究科に在学中は、多分野の刺激を受けながら、私は中国の対外環境援助活動の研究に没頭した。私は修士論文を「中国の対外環境技術協力」というテーマで書き上げた。それまでの社会認識は中国が環境技術の後進国で、環境技術援助を受ける立場だとの固定観念があった。しかし実は、文献調査によれば、中国は一九六〇年代からすでにバイオマス、小水力発電などの分野において、アフリカ諸国はじめ、多くの発展途上国に環境技術を輸出した実績があった。現在でも、定期的に、発展途上国の研修生を受け入れ、太陽光発電、小水力発電などの研修課